

ラクダに教えられたこと

1998 年 9 月より約 1 年間オマーンで仕事をする機会を与えられた。仕事場は沙漠の真ん中にある農業試験場であったが、居を構えていたサラール周辺地域にある山岳部の植生改善について考えていた際、援助のあり方について考えさせられたことがあった。今回はそのことについて述べたい。まずは、その山について面白い話があるので紹介する。在オマーン日本大使館を訪れた際、着任して間もない職員が、テレビを見ていた時あまりの緑の多さに日本のどこかと思っていた風景が実はオマーンだったと驚きながら話してくれた。テレビに映し出されていた場所はオマーン南部に位置するドファール地方の山岳部だった。私自身はその地方の中心となるサラールの街に住んでいたため、実際にその風景を目の当たりにし、彼以上に驚いた次第だ。

なぜ陸の孤島的に緑が存在する地域があるのか？それは、この地域が 7、8、9 月のモンスーンの影響で湿った空気が南のインド洋から吹き付け、これが山岳部にぶつかり降雨・濃霧を発生させ他の地域とは異なる気候的特性を有しているからである。よって、その期間はサラール周辺は涼しく首都マスカットや他の湾岸諸国（サウジアラビア、UAE、カタール等）から多くの人々が避暑にやってくる。彼らは、曇り空、霧雨の中でピクニックを楽しんでいるのだ。砂漠の中で暮らしている彼らにとってはこのような天気は珍しく、しかも良い天気なのだ。

しかし、この山岳部では近年過放牧（牛、ヤギ、ラクダ）による植生減退が問題となっている。現在、ラクダの家畜（現金収入源）としての重要性が薄れてきているにもかかわらず山岳地域で、1994 年の資料によると約 47,000 頭のラクダが飼われている。（牛 147,000 頭、ヤギ 89,000 頭；15 号ドファールの農業（3）参照）それならば山岳部の植生保護のために、まずラクダの頭数を減らすことが我々の頭の中に浮かぶ。しかし、彼らにとってラクダは財産であり、それよりも何よりも彼らはラクダが好きなのだ。私自身のラクダに対する印象としては、最初は物珍しく興味をもっていたが、道路の真ん中に立ちはだかりクラクションを鳴らしても知らんぷり、肉は臭みがあり硬く、乳は牛乳と変わらないが、よりあっさり、ややしょっぱい、といったところであまり良い印象は持っていなかった。ある日、カウンターパートに、なぜ牛ではなくラクダを飼うのか尋ねたことがあった。彼は一言「ラクダはかわいい」と言い、その後もラクダのしぐさや習性を説明してくれた。彼には車があるので、運搬用にもラクダは必要なく彼にとって何のメリットもないように思うが、現在も飼っているのだ。それはラクダが好きだから、先祖代々続いてきた習慣というか、ラクダがいる生活は当たり前なのだ。このような情報は日本にいても入手できなくはないが、頭で理解するのと現地において実感として肌で感じるのでは大違いだ。

我々としては、客観的に植生減退の現状を十分に把握した上で、かつ彼らのラクダが好きなんだ、かわいいんだという心情を心に止めながら、何かお手伝いできればよいと思っている。また、そういった地域住民の心情をできる限り考慮に入れた援助でない限り、持続性は期待できないだろう。いつまでも沙漠の民が霧と緑の中でピクニックを楽しめることを願いながら筆を置くこととする。

（サラールにて：飯山）



緑に覆われた山岳部



ラクダの乳搾り
（子ラクダに乳を飲ませながら搾る）